

**京大初！  
京都大学から初めてのクラ  
シックチャンピオン誕生  
女子・番場洋子（京都）**

**レベルの高いレースを僅差  
で制し 21 世紀最初のチャン  
プに輝いたのは  
男子・安井真人（早稲田）**

## 舞台は愛知県作手村

エリートスタートへの待機所となつた作手の野外教育センターには前夜降った雪がうっすら積もっている。あたりの山には水墨画のようなモノトーンの静寂がおおっている。この静かな山の中からスタートし、仲間たちの応援の待つ会場に 90 分間走り続ける。このシチュエーションはインカレのエリートクラスならではのものだ。

7時53分、第一便のバスが到着。10分とおかずに第二便のバスも到着した。降った雪もバスの運行には影響を与えていないようだ。到着限界時刻である 8 時 32 分よりも 30 分以上も前の到着だ。バスからは、次々と選手が下りてくる。まだ名のある選手はいない。むしろオフィシャル陣たちの動きが目だっている。松沢、鈴木、小河原、日本を代表する選手が選手をサポートしている。むろん、今日の主役は彼らではない。学生たちだ。

8 時 30 分過ぎ、まだ準備すら始めていない選手がいる体育館を出発して、前走をすることになっている私は、スタートに向かう 30 分の道のりをジョグし始めた。急な登りを歩いていると、前方から時折走ってくる人がいる。選手が来るにはまだ早すぎる。各大学のオフィシャルである。こうやって

選手がスタートに向かう前に道のりとトレインの状況を確認して選手に伝えるためであろう。適切な情報が事前に与えられるほど、選手は安心してスタートすることができる。

巴山山頂に祭られた祠から 50m 下りたところ、それがプレスタートだ。トレイン内の最高地点、そして三河地方の名前の由来となった男川、矢作川、豊川、この三川の分水嶺から男子 9.9km、女子 6.0km のレースがスタートする。

男子コースは、トレインの北を走る尾根をひたすら東にたどるロングレグから入る。予想どおりのコース展開である。その後コースはトレイン東部から山越えで南の斜面へ。高い技術を要求する微地形にショートレグが組まれている。8 番の第一ラジコン後、尾根を大胆にあがるロングレグだ。こういうタフな区間をいかにスピードを落とさずにクリアできるかが勝負のカギだ。その後斜面を斜めに切つてのアタックが要求されるレグが 2 つ続く。技術的にはここまでが山場である。会場に向かう主要道路を越えると技術的な課題はほとんどないが、ゴールに向けて大小二つの丘を越えてゆかなければならない。体力的には最後まで楽をさせてくれないコースなのである。

一方女子も前半が尾根走りを 1km ほどした後、南の斜面に入り、5 番が男子と共通、その後鞍部を二つこえて、男子 11 番以降とほぼ同一のプロフィールとなる。男子と比べて若干体力的・技術的に楽なことは、登距離を見てもわかるだろう。

## 選手権男子

11 時ごろから、男子エリートがゴールしはじめる。11 時 25 分、京都の西尾がゴールする。タイムは 83 分。10 位が狙えるタイムだ。11:45 分には女子トップの下村（東北）が 73 分でゴール。「巡行スピードが遅かったので、つぼるってことはなかった」。しかし、このタイムはすぐに京都の石川に更新される。



男子 2 位の金澤拓哉（東北 3）

12 時台にレースは佳境に入る。東北 3 年シードトップの金澤は中間ラジコンを 33'07 の好タイムで通過していたが、12:33:23、71'05 でゴール。永らくトップにたっていた西尾のタイムを 11 分更新する。「思い描いたようなレースができた。コース距離と登りからしてタフなコース、80 分近くはかかるかと覚悟していたが、簡単だった。タフなレースに備えたことで身体の調子は今までで最高。紺野さんがベストで来たら抜かれるかもしれないけれど、他の人には負けないでしょう。なんていって、抜かれちゃったりして・・・」と最後は金澤らしく、おちゃらけてみせたが、中間でのタイムといい、ゴールのタイムといい間違いなく

優勝と思わせるタイムだ。この日は5人のナショナルチームのメンバーが前走していたが、金澤のタイムはそのトップタイムに1分20秒と迫るタイムである。「間違いない、これで決まりだよ。おめでとう」実際僕も金澤にそう祝福の言葉を贈った。

「体調は完璧でした。登りに負けないように、かなり走りこみましたから。前半の尾根走りは、不得意なところなんですけれど、そこは我慢して丁寧にいきました」と、金澤はレースを振り返る。

男子エリートクラスは、この金澤のお化けタイムで、ほぼ決まったように思われた。まだレースは半分の選手がゴールしたにすぎないが、一部の観客の間には「もう決まった」という終了ムードが実際に流れていた。名指しでライバル視された紺野も中間で34'30と、1分半近い差がついている。紺野は2番の尾根たどりに失敗し、ほぼ沢底まで落ちている。金澤の後半も悪くないタイムだ。優勝候補筆頭である紺野は、後半11でも下り過ぎ、結局71'17と、金澤に秒差で及ばなかった。金澤の優勝は確定、そう思われた。



男子3位 紺野俊介(早稲田4)

残る可能性の安井(早稲田)も第一中間では紺野を上回ったものの、金澤にはやはり1分以上の差がついている速報が出された。しかし

実際には安井は8番を、ほぼ金澤のタイム33'09で通過していた。第一ラジコンは8番から少し離れたところとは言え、その間ミスをするような場所ではない。このタイム差の違いは謎である。その後安井は、第二ラジコンを59'52で通過すると、金澤を10秒上回る70'55でゴールしてしまった。



男子優勝 安井真人(早稲田4)

ラップを見ながら、もう少し詳細に上位3人の争いを分析してみよう。安井は1番でコントロールのある枝尾根に乗れずミス。4'27で、この区間のラップをとった紺野とはすでに51秒もの差がついている。「やばいと思って2番まではふらふらレースをしていた」と安井は振り返るが、すでに2番では立ち直っている。8'29とこの区間2位の金澤を24秒上回るタイムを出し、ここでミスをした紺野を抜いて2位に浮上している。その後安井は気を取り直して淡々とレースを続けた。

登りに負けそうになると、「ここできつと紺野は走っているんだろう」と考えながら、安井はがんばり続けたという。確かにその通り。安井は紺野や金澤に登り区間で随分差をつけられている。たとえば中盤の山場である9へのレッグで

ある。安井12'52、金澤11'39、紺野10'44。紺野はこの区間2位の金澤を1分近く離すお化けタイムだが、安井はそれより2分も遅いのだ。この結果、10番まで安井4856(3)、金澤4754(1)、紺野4804(2)と結果が逆転している。

紺野が脱落したのは、次の11である。ここで紺野は67位の6'28というタイムでいっきに後退している。この後、紺野は15,16,17番とラップをとり続ける。安井もほぼそれに次ぐタイムで15番で逆転、その後の金澤の猛追をかわしている。金澤の15,16でのもたつきが最終的には勝負を決したといえるだろう。

安井は年間をとおしてコンスタントに200kmを走り、今年に入ってから愛知の地図を中心に毎日1時間くらいの地図読みトレーニングを欠かさなかった。地元愛知の出身でもあり、地元で勝ちたかったという執念が実ったの優勝であった。

2位が決まった金澤のところにいくなり、「うそつき」と言われた。2位にはなったものの、金澤が「絶対優勝だ。間違い」そう言わせるだけのレースをしたことも確かだ。ここ3年、ナショナルチームはインカレで前走をしている。雪の中あきらかに前走の条件が悪い常盤ですら7分差、山口でも日光でも10分近い大差が学生優勝者との間についている。今回の金澤のタイムはたったの1分半。3位の紺野までは文句なく素晴らしいタイムである。

## 選手権女子

一方の女子は、ノンシードの横江君香（京都橘）がそれまでの最高ラップである塩田純子（筑波）のタイムを2分以上上回る29分でラジコンを通過するが、その直後に小林啓恵（東北）が26分という素晴らしいタイムでそれを上回る。後半のタイムは前半+2-3分程度。このままいけば55分が出るかもしれない。この二人のスタートタイム差は4分、このまま二人がつるんで後半のレースを展開した時のタイムに期待がかかる。



女子3位 横江君香（京都橘4）

なかったが、3位の63'38秒でゴールした。「ミスはなかったんですけど、リズムに乗り切れないままに終わってしまいました。どうしちゃったんでしょうね。いつもは止まらないところで止まったりして。いつもはチェックポイントでも止まらずに通過するんですけど、今日はぱっと走って、とまって、って感じでした。心理的な面ですか？開会式で疲れちゃったのかな。」上松のようにひょうひょうとレースに臨んでいるように見える選手にとっても、インカレとは特別な大会なのであろう。



女子2位 小林啓恵（東北4）

実はすでにこの時、小林は一度横江に追いついている。この時点（4番）では、番場が1位（18'04）で小林が2位（18'25）である。しかし中盤の緩斜面を切る5番（男女共通）で小林は直進、横江は下に迂回し、横江が小林を振り切ったらしい。この区間小林は7'16とトップラップの塩田（4'45）から2分半も遅れている。小林はその後斜面のコントロールでミス。一度は追いついた横江に差を広げられた。横江が62分でゴールしトップにたった直後、小林は60'56でゴール。かろうじてトップとなる。

その後、シード選手が続々と好タイムでゴールする。第二シードの森田（静岡）が69'35で、5位相当でゴール。しかし、ノンシードの池田（北海道）が、それを上回る4位相当のタイム。しかもまだ上松、番場、塩田が残っており、森田念願のメダルはすでに厳しい。続くシード、親子オリエンティアの古澤（広島）は66'44と上位入りに期待がかかる。



女子4位 上松佐知子（筑波4）



女子6位 池田和香子（東北4）

女子のレースもいよいよ最終局面に入る。難度の高いコースだけに好成績が予想される上松は前半出遅れる。その後もタイムが伸び

上松がゴールしたころ、京都の番場はすでに最終ラジコンを通過していた。前半を26分で走った番場にも好タイムの期待がかかる。彼女は後半もペースを落とすことなく快走する。それまでトップにいた小林のタイムを3分以上上回る57'01でトップを決めた。足首の故障や二週間前の風邪に悩まされた番場だが、大きなミスもなくレースをまとめ、栄冠に輝いた。「男女共通のラジコンへの直進では、ペースが落ちちゃいましたけど、コンパスを見て何度も止まって走りました。」確かにこのレッグでは、番場は唯一とっていい遅いラッ

ブだ(トップ+2分半)が、インカレという大舞台でその後のレースを冷静に進められたことが、勝利につながったのであろう。



女子優勝 番場洋子(京都3)

番場としばしば合宿をともにした落合志保子は、番場の成長をこう語る。「2週間前に京都大学の直前合宿に行き、短いコースを2本走ったんですが2本とも番ちゃんに負けてしまいました。実は練習でどんなに気が抜けていても番ちゃんに負けると言うことは今まで一度もなかったことだったので、その成長ぶりに本当に驚きました。今まではラップの上でも勝っていたのに、ちょっと気を抜くと負けてしまうレベルにまで達していたのです。番ちゃんには「間違いな

く学生のトップレベルにあるから自分を信じて走ってね」と声をかけていました。今までは番ちゃんを後輩のような感じで見ていましたが、これからは同じレベルで競い合う仲間になったなと実感しています。」

東大や東日本の21Eで優勝に輝いた塩田(筑波)は前半2番で11分のミスをし、64'25のタイムで5位に終わった。その他のラップはほとんどが1位か2位だったところに塩田らしさが現れている。またしてもインカレでは同僚上松に勝てなかったが、彼女がその持ち味をフルに発揮する日が来ることを期待したい。



女子5位 塩田美佐(筑波4)

## レースを振り返って

上位の結果は以下のとおりである。横江はシードである筑波の二人を抑えての3位。立派な結果である。1月には太腿骨のひびで、2週間の安静。体力的に追い込んで準備できなかった反面、地図読みのトレーニングは十分行ったという。地図メモリーの練習を徹底したことで、地図の先読みによって走れるスタイルとなった。また副産物としてメモリーできないのはプランが悪いからだということに気づけたことが大きい、とコーチである尾上秀雄は、準備の成功を強調した。

今回の入賞者のうち番場、小林、上松、塩田の4人は昨年に続いての入賞である。この結果にも、今年の上位陣の充実ぶりがうかがえるが、その中で入賞したノンシードの横江、池田も評価できるだろう。実際この二人は、シードを決めるインカレ技術委員会でも候補者としてはあがっていた。また女子学生の動向に詳しい尾上氏によれば、直接対決星取表を作成してみると、上記4人を除いた対戦成績では横江、池田が1,2位になるという。上位陣が確実に力を出してきたインカレ、そう評価することができるだろう。

### 女子(WE)6.0km 260m

- 1) 番場洋子 (京都3) 57'01
- 2) 小林啓恵 (東北4) 60'56
- 3) 横江君香 (京都橘4) 62'20
- 4) 上松佐知子(筑波4) 63'38
- 5) 塩田美佐 (筑波4) 64'25
- 6) 池田和香子(東北4) 65'13

### 男子(ME)9.9km 540m

- (1) 安井真人 (早稲田4) 70'55
- (2) 金澤拓哉 (東北3) 71'05
- (3) 紺野俊介 (早稲田4) 71'17
- (4) 許田重治 (京都3) 76'44
- (5) 加藤弘之 (東京3) 76'44
- (6) 猪飼 雅 (金澤4) 79'53

一方男子は、安井が同僚紺野を抑えて、優勝した。早稲田大学の男子個人戦優勝はなんと第2回の小山格以来21年ぶりである。まだ紺野の名前しか知らなかった2年前、僕は早稲田の合宿に呼ばれて紺野、安井、西村などのランオブをしている。その時、紺野以外にも切れ味のある選手がいるじゃないか、そう思ったのが安井だった。しかし、公認大会等で上位に入りジュニア世界選手権に遠征して目だってきた紺野に比べると、安井は目立たない存在だった。しかし、紺野自身常々、「近くに刺激を与えてくれる存在がいるので(がんばれる)」と語っていた。「紺野ならここで走っていると思うとがんばれた」という安井のコメントに、紺野なしには安井の成功もなかったことが分かる。



男子4位同タイム 加藤弘之

(東京3) 許田重治(京都3)  
4位の加藤と許田は同タイム。同タイム入賞者は、第8回駒ヶ根インカレの石原(千葉)と滝川(神戸)以来である。6位には、猪飼雅(金沢)が入った。紺野とともに2年生の時ジュニア世界選手権に参加しながらも春のインカレでは初入賞である。北信越学連としても初の男子入賞者となった。



男子6位 猪飼雅(金沢4)

今回は男女とも、「インカレ新記録」。もちろんコースの長さや登距離の違うオリエンテーリングでは、「新記録」には意味はないが、上位選手が素晴らしいレースをしたことは確かだ。コースプランナーの水嶋(静岡OB)も、男子は73分くらい、女子は60分は切れないとみていた。女子の試走をした落合志保子も、「12月に走ったときは、今回のコースよりも中盤がもう少しやらしく、でも最後の登りはないもので、私が57分。前半の尾根走りに時間がかかるだろうという判断から60分はきれない」と予想していたが、実際にはそれぞれ予想よりも3分よいタイムであった。

忘れてならないのは地図の質である。地図の精度が低いとどうしてももうまい選手とそうでない選手の

差がつきやすい。男子上位が緊迫した競り合いを演じ、ナショナルチーム上位選手と同等のレースができたことは、高い精度の地図のうえに十分にコントロールされたコースが組まれた結果であろう。このような競技性の高いレースが行われることで、競技者の持つ潜在的な力が引き出されるのである。

「最後の2、3日の結果だよ」と、地図作製者の山川は言う。現在人工透析を受ける彼は、今年に入ってから透析中のミスで、血管に傷をつけた状態の身体で地図調査を続けた。「静脈だと思ってたから地図調査したんだよ。動脈と分かってからは、医者にも絶対安静を申し渡された」。今回の地図も、RMOサービスの地図作製の歴史に1ページを付け加える一枚となった。

なお、男子新人クラスでは、寺垣内航、立花聡(ともに早稲田)、また女子新人では、スキーOですすでに国際大会で活躍している植野由香(北海道教育大学)が優勝している。(情報を提供してくださった、落合志保子さん、奥村理也さん、尾上秀雄さんに感謝します)